Ⅳ-118　地形による空間構成法

東京工業大学社会工学科　正　植田憲彦

私たちの祖先は、地形のわずかな起伏やひだに、さまざまな意味をこめたし、それを読みとることもできた。それは、死者や死霊、祖霊のあるいは祖神の常住む伊穂利であったし、また怨霊を封じこめる所でもあった。彼等の信仰は、地形によって約束されていたともいえるわけで、地形との間には、敬虔ともいえる精神的な関係性が存在していた。ところで、ケビン・リンチ[*1]も指摘するように、地形を理解するという点では、現代におけるよりも昔のほうが進んでいたのではなかろうか。地形との敬虔な精神的な関係を失うにつれて、地形に変化を与える力を増すにつれて、私たちは、地形に対する鋭敏で思慮深い感覚を失ってしまったといえる。

日本における神社、寺院、庭園、都市等の占地（立地）において、地形はどのような意味をもっていたのか、地形による空間構成法という観点から、古人の態度を学びなおしてみたい。

1. 水分神社（みくまり）　松田国男[*2]は、日本の稲作灌漑法の発展段階を、(1)天水場によるもの (2)溝水掛りによるもの (3)池掛りによるもの (4)堰掛りによるもの、としたが、水分神社は、(2)の段階の宮田組織における用水分配の信仰にもとづいて成立ったものといわれる。占地の地形的特徴は、山から流れでてくる水の田への最初の引き入れ口である水口、山から山麓の緩傾斜の地にうつる勾配変換の地である。その山側の丘陵端に位置しているため、低地による田地からの見かけは非常によく、また神社からの田地の見晴しもすぐれている。水分神は、農耕景観上常に田地を見守り、農耕者はごくわずかな傾斜をもった田地から仰観点の未上神の生き社を見せる。　例。大和の都祁（つげ）水分神社とその上流 小山戸山口神社、大和古市場の宇多水分神社とその下流 井足の宇多水分神社、大和の葛木水分神社、河内の穂積（ほづみ）水分神社。

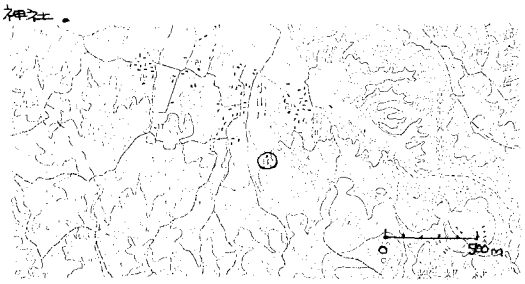


図-1　都祁（つげ）小山戸山口神社（都祁水分神社の前身）

2. 天に連なれ やまと　日本書紀は、神武東征の目的地の空間を「東に美（よ）き地有り。青山四周（めぐ）れり。」と描いた。それは、狭い国ではあるけれども蜻蛉（あきづ）の臀呫（となめ）して飛んで行くように山々がとり囲んでいる国であり、「天地（うち）の内一つの国」であった。それは、折口信夫[*3]等のいう「気候がよくて、地力豊の豊かな、住まよい国」である古代人のあこがれ求めた理想境「常世（とこよ）」であり、光明境であったのかもしれない。なぜ四周を山に囲まれた盆地に連なれ やまとが一つの理想境として選ばれたのか。周囲の山から流れよる水、手近な山の幸にめぐまれたこと、軍事的に有利であったことと同時に、空間意識的に広大な平地の民族であるエジプト人がおそれられたという空間恐怖[*4]をそこにおいては却けることができたからであると考えることができる。　例。大和盆地における多くの古代宮地跡。しかし宮地跡において天平期の久米寺ほど明確な形態をとった例は少ない。

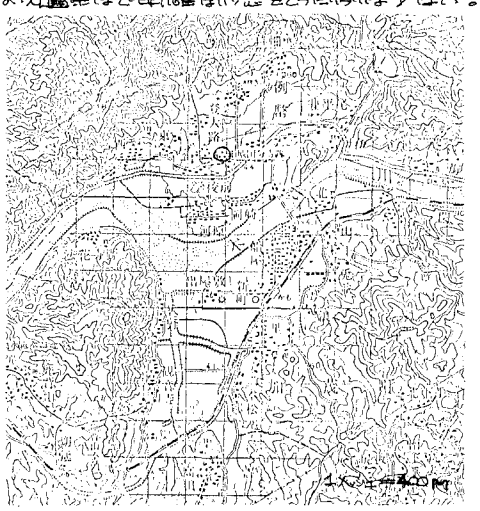


図-2　久米寺（山城国分寺跡に宮殿があったという）

3. 八葉蓮華　空海は、「四面高嶺にして人足絶みち絶えた平原の幽地」高野山に密教寺院をいとなむ。そこは、周囲を八つの峯がとりかこみあたかも胎蔵八

葉の蓮華を表示していることから，いつしか八葉蓮華と呼ばれるようになったという。秋津洲やまと国様ここにも周囲を山により囲繞された地形を聖化する観念がある。例。高野山，室生寺。

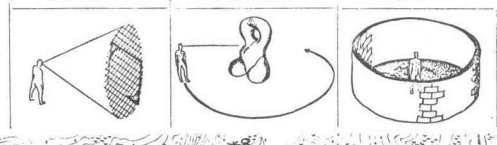
4. 蔵風得水　都城や住居，墳墓などの占地の理論に風水思想がある。地形と方位によりその地の吉凶を判断したが，地中に流通する正気が水によって阻られ風によって散じぬ様にを言とした。その一般的な地勢は，後(北)に山を負ってなお(更)に丘陵なもち前面に平地流水を臨むものであるという。*5 これは，フトコロ型の地形あるいは富士・風呂(ふと・ふっと)といわれる地形で日本においてはきわめて一般的に目にする地形パターンに一致している。水を得，北風をさけ，日当りのよい居住適地であった。眺望もよく，いわゆる後山前水型もこの系列に入る。例。藤原京(2.とも見なせる)，平城京，平安京，鎌倉，京都の山差山鉄砲，磐城の白水阿弥陀。

図-3 鎌倉(『日本の歴史』別巻2(中央公論社)より)

以上の1～4まではエルン・ゴールドフィンガーの下図*6のSPATIAL(concave)の分類に入るが，以下とりあげるものは，PLASTIC(convex)の分類に入ろう。

図-4

PICTORIAL	PLASTIC	SPATIAL
2-dimensional (flat)	3-dimensional (convex)	3-dimensional (concave)
Static	Stereoscopic	Kinetic
Apprehended consciously from without	Apprehended consciously from without	Apprehended sub-consciously from within



5. 神奈備山　これは，山岳信仰としての聖山で，平地に近く，聚落に接して，独立峯であるかさもなければ山容が周囲の山から目立つ山あるいは丘陵である。平地からの見かけはすばらしく，ランドマークとしての成立条件をきわめてよくそなえている。例。大和の三輪山，出雲の四つのかしナビ山，春日神社の御蓋山，日吉神社の中尾山。上賀茂神社の神山，御上神社の三上山，厳島神社の弥山等。

6. 国見山　国見とは，もともと農村における農耕予祝儀礼であったといわれる。平地としての自分たちの国土農地を一望のもとにおさめるには，視点を上げ平地に対する視線入射角を増大させねばならない。平地に接する端山そして平地に孤立する独立丘が当然のこととして国見山として選ばれた。宇佐神宮あるいは石清水八幡宮等の男山神社あるいは姫路城などの平山城はこの系列上にあるといえる。例。天香久山，播磨の大立丘，大見山，御立峯，常陸の理兎の丘等。

図-5 出雲カムナビ山の一つ茶臼山 (1メッシュ=400M)

その他については，紙面の都合上省略するが，最後に天智天皇建立の崇福寺跡に見られる，地形に対して注意深く人工構築物を適応させた古代人の感覚を，「もはや背景と調和して作用する国産を無意識におこなうことのできなくなってしまった私たちは謙虚に振返る必要がある。

図-6 崇福寺実測図*8 (縮尺1/M)

*1. ケビン・リンチ『都市地形の技法』前野・佐野訳(鹿島)，*2. 松本哲夫『海上への道』(筑摩)，*3. 折口信夫『妣が国へ・常世へ』，*4. ベルリンゲル『社会心理学』感情移入』草薙訳(岩波)，*5. 斎藤忠「上代における墳墓地の選定」『史地理』vol.65.No.5，*6. "Landscape we see" p.196，*7. K.リンチ，ibid.，*8 実測図『滋賀県史蹟調査報告第十冊 大津宮阯(下)』より。